

## 発見時代の神話

ホセ・マヌエル・ペドロサ

(スペイン国立アルカラ大学専任教員：文学理論・比較文学)

スペインで、そして世界中で、1492年は、歴史においてそれ以前とそれ以後の一線を画す重要な年となった。1492年は、一般的には「アメリカが発見された」年である。さらに、スペインでは別の意味でも非常に重要な年とみなされている。なぜなら1492年にイベリア半島における最後のイスラム王国グラナダが陥落し、統一されたキリスト教国スペインの領土に統合されたからである。そして、その同じ年にカトリック両王が、もう何世紀も前からその地に暮らしていたユダヤ教徒に対する追放令を発したからでもある。イスラム教徒とユダヤ教徒の追放は、達成されたばかりの政治的統一を宗教的統一にもする目的で公布された。しかし、完全な宗教的統一は実現しなかった。なぜならスペインには、キリスト教徒に改宗させられた非常に多くのイスラム教徒（モリスコ）<sup>1)</sup>とユダヤ教徒（コンベルソまたはマラーノ）<sup>2)</sup>が残り、激しい異端審問にもかかわらず、何年も何世代もの間、自分たちの宗教を密かに信仰し続けたからである。

歴史家は、今日、これらの重要な年号がもつ役割を相対化するようになってきている。歴史を、「以前と以後」の間に確固とした明確な線引きを行う象徴的な年号の集合体としてではなく、ゆっくりと複雑に絡み合うプロセスとして理解するようになってきているのである。1492年という年号は、それ以前から続き、それ以後へとも続く鎖の輪の1つに過ぎない。それは、政治的な記念行事的一幕や歴史の教科書の一節に矮小化されることのできない道程における交差点の1つなのである。事実、「新世界の発見」という言葉と概念は、「発見

した側」を能動的、「発見された側」を受動的とする位置づけを伴う、並外れたセンセーショナルな出来事に言及しているのだが、スペインでは「2つの世界の邂逅」という、より肯定的で包摂的な婉曲表現でしばしば言い換えられる。こうした婉曲表現は、多くの批判を受けてきたことも確かである。逆に、まったく包摂的ではない、戦争に関わる表現から取り込まれた「征服」という言葉を使う者もある（たとえば、フランコ体制下のスペインでは頻用されていた）。5世紀たった今日、スペインでもアメリカでも、当時の事実に関する用語や解釈についての議論が続いている。これは、すでに述べたように、歴史が、狭窄な解釈やセンセーショナルな新聞記事、大仰な見出しに矮小化されえないということの証である。いずれにせよ、本質的には実用的な理由から、スペインでは（そして他の国々においても）中世は1492年頃に終わり、その後近代と呼ばれるものが始まると考えられることが多い。もっとも、この後でみるように、近代の始まりを1450年前後と主張する歴史家も多い。それは、世界の歴史と文化を根底から変えたであろう発明である印刷技術の初期発展とともに近代が始まったという主張である。

私は、歴史が非常にゆっくりと、複雑に、単一方向ではなく多方向へと向かうプロセスであるという考えを支持する者の一人である。たとえば、1402年と1488年である。これらは、一般的には、いわゆる「カナリア諸島の征服」を指しているが、これが「アメリカの発見」への道を切り開いたことは疑う余地がない。しかし、それらの2つの重大な年号についても反論の余地がないわけではない。なぜなら、実際、カナリア諸島は大昔からすでに「発見」されていたからである。ギリシャやローマの地理学者や博物学者たちが、カナリア諸島について書き残している（島の1つ1つについて名前すらつけていた）。これは、ヨーロッパとそれらの島々との間に接触があったという証拠である。史料は残っていないものの、私たちが想像する以上に、その接触は濃厚であったかもしれないのだ。

そして、1492年は、それより後の年号なくしては、やはり理解されえないものである。スペイン人や、ポルトガル人を初めとするヨーロッパ人たちの進出、それも、アメリカだけではなく、アフリカ、インド洋、アジア、太平洋ま

でに至るものを示す諸年号がそれらである。しかし、私は歴史家ではなく民族誌学者であり、したがって継続するプロセスに興味がある。王族や政治家、軍人などの行動だけでなく、小文字の歴史、すなわち一般の人々が語り、感じ、行うことにも関心がある。私自身は、エリートの文化ではなく、とりわけ民衆文化の研究に専念してきた。そのおかげで、「公式の」視点とは異なった見方から出来事を解釈する術を得、またそうしなければならないと考えている。なぜなら、ご承知のように、歴史というのはいつも、勝者と権力者によって記されてきたからである。弱者や下層階級の人々、敗者といった「その他大勢」の立場や視点から歴史をみようとすることは、過去の出来事をより豊かで包括的に理解するための、まっとうで不可欠な作業と言える。

さて、アフリカの文化や文学を研究した経験からも話をしてみたい。アフリカはスペインの海岸線からわずか数キロのところにある大陸であるが、スペイン文化とその研究にとっては存在しないも同然である。アメリカは1492年に「発見された」と言われているが、アフリカに至っては、これほど近くにあるにもかかわらずまったくと言ってよいほど忘れ去られており、「発見」される栄誉にすら浴してこなかった。現実にも、スペインの（そしてヨーロッパの）学校教育では、スペインは文化的にも言語的にもインドヨーロッパ系であると教えられている。しかし、よく考えていただきたい。「インドヨーロッパ」という概念は、セムの要素（つまり、アラブの要素やユダヤ的な要素）とアフリカの要素を排除している。これは無知ではなく、完全に意図的なものである。スペイン人はインドヨーロッパ系である、すなわち、遙か昔にインドからヨーロッパに渡った人々の末裔であると言われる。これはまるで、ほんの少し南にだけの人々との混交が生じなかったと述べているかのようである。

しかしながら、スペインの文化形成におけるセム系およびアフリカ系の文化の影響は甚大であるし、アメリカの文化形成においても一定の影響を与えてきた。それは、一般的に考えられているよりも遙かに大きなものである。現在でも、アメリカの多くの国々には、アフリカで捕らえられ、奴隷として大西洋上を移送された人々の子孫（アフリカ系イベロアメリカ人）の重要な集団が残っている。それらアフリカ系イベロアメリカの人々は、あらゆるところへ広まり

つつあるグローバリゼーションの脅威にもかかわらず、今日まで、言語的、宗教的、音楽的、民族学的に並外れて豊かで特徴的な文化を維持している。スペイン人およびイベロアメリカ人に残されている喫緊の課題は、イベリア半島およびイベロアメリカ全般の文化におけるセムのおよびアフリカの起源を認め、これをさらに研究することであろう。このためには、スペインの文化やそのアイデンティティの基盤を再解釈することが必要であろうし、そうすることは非常に有益であろう。

「発見」について語る時、人はしばしば、1492年以降にスペイン人（とその後の多くのヨーロッパ人）がたどり着いた新しい土地のことだと考える。しかし、当時の最も重要な「発見」は、地理的なものではなく技術的なものであったと主張する人もいる。具体的には、1449年以降にドイツ人ヨハネス・ゲーテンベルクが開発を始め、その後の数十年のうちにヨーロッパ全体に（16世紀初頭以降にはアメリカにも）広がった印刷技術のことを指しており、これは「発見」と同じ時期に世界の文化や意識、歴史や科学を変えたのである。したがって、中世の終わりと近代の始まりを、印刷技術が発展した時期に置く歴史家がいることは不思議ではない。いずれにしても、15世紀の終わりに、印刷技術の開発とスペイン人のアメリカ大陸到着という2つの異例の出来事がほぼ同時に生じたことは確かであり、世界は一変した。時の流れにおける2つの出来事の偶然の一致は、間違いなく、それぞれの影響力を増幅したのである。

聖書にはあらゆること（過去・現在・未来にわたる）が予言されていると信じられていたが、その聖書に予見されていなかった未知の大陸との予期せぬ遭遇は、スペイン人、さらにはヨーロッパ人の間に、ある種の存在論的孤独のような、知的かつイデオロギー的な危機をもたらした。その危機を克服するため、初期には、聖書の教義との整合性を保つ目的で、アメリカのインディオ（先住民）はイスラエルの失われた部族の子孫であると主張されることもあった。もちろん、アメリカの先住民は古代のユダヤ人とは無関係である。また、新しい土地やそこで発見された人々は、（地球が丸いので、ぐるりと回って）到着予定だった遠く東洋の一部だとも考えられたことがある。新しい土地やその住民に対して付与されたインディアスという名前はこれに由来する。さらには、古

典や中世に起源をもつ東洋に関する古い伝説と、アメリカで「発見されつつあった」新しい現実とを混同した華やかな神話までが登場する始末であった。実際、アメリカで最も重要な川が「アマゾン川」と名付けられたのは、神話に出てくる川に到達したとスペイン人たちが考えたからであった。古い伝説によれば、その川の近くには、伝説の恐ろしい女戦士、アマゾネスたちが住んでいるということであった。しかし、古いモデルに基づいて、新しいアメリカを再び神話化する作業はうまくいかなかった。アメリカ到達の数十年後には、スペイン人のなかでも聡明な者は、新しいアメリカの大地を聖書の内容や旧大陸の大昔の神話に依拠して解釈することは不可能であることに気がついていた。

当時は、すべてをゼロから解釈し、それまでに蓄積された知識のすべてを検討することが必要となっていた。新しい科学、新しい地理学、新しい歴史、新しい自然科学をつくりあげなければならなかった。そして、それを始めたスペイン人たちがいたのだ。実際、十分な知的条件を備えた植民者が書き残した「インディアスの記録」は、今日では世界的に、地理や社会、自然地誌に関する有益で現代的な科学的テキストとみなされている。多くの「インディアスの記録者たち」は、注釈にまで細かいこだわりを示す科学的的好奇心にあふれた知識人であり、自分たちが入り込み接触した新しい世界と文化に関して信頼性の高い記録を残すことに誠実な関心を抱いていた。

これは、15世紀の終わりから16世紀にかけての、印刷技術が完成しつつある時期と一致していた。印刷コストは下がり、印刷物の流通も速くなり、より多くの場所に印刷物が届くようになっていた。また、高価な分厚い本だけでなく、小さな折り本やパンフレットも流通するようになっていた。それが、修道院や宮廷といった場所の外の、書くという行為が一般的ではなかった場所で起こっていたのである。印刷技術の発展は、初等教育や大学教育にそれまでみられなかったような盛り上がりをもたらした。読み書きを学ぶための本が普及し、ますます多くの人が教育にアクセスするようになっていたからである。

印刷技術は、なによりも、科学分野における一大発展の契機であった。印刷技術のおかげで、実用的で近代的な実験科学が誕生したのである。印刷技術が登場する前は、文化は基本的に口承であった。そして、口承は非常に特異的で

ある（と同時に制限がある）。まず、口頭による情報は変化しやすい。というのも、私たちが肉声で何かを語る度に、私たちはそのテキスト性を変えてしまうからである。スペインの歴史で最も影響力のあった文献学者ラモン・メネデス・ピダルが明白に述べたように、口承文学は差異のなかに存在する。そして、口承では科学は成しえない。せいぜい、魔術的宗教的な思索、おとぎ話、叙事詩や叙情詩といったところである。実用的な科学を成すためには書かねばならない。そして、安定した基盤の上に変更されることのない情報を保存する方法を発展させなければならない。印刷技術は、書かれた情報を保存すること、とりわけ、情報を複写して低コストであらゆるところへ届けることを可能とした。これにより、近代科学が、（スペインも含む）ヨーロッパ、そして世界で発展するために適した、安定確実な方法がもたらされたのである。

それだけではなく、印刷技術の発展は、いわゆる「発見の時代」の文化に顕著なもう1つの効果を生んだ。印刷技術によって支えられ増幅された書く技術は、ヨーロッパ文学にリアリズムをもたらしたのである。口承文学は、リアリズム文学にはなりえない。なぜなら、テキストの細部までを記憶することは不可能だからである。口承文学は、想像力に富み、空想的かつ思索的でありえるが、それ以上にはなれない。スペインでは、1499年に「ラ・セレスティーナ」初版が出版されている。スペイン文学における（そしておそらくは世界でも）最初のリアリズム文学の作品である。「ラ・セレスティーナ」は印刷技術の申し子である。口承文化の環境においては生まれることも広まることもなかったであろう。1499年に続く数年、「ラ・セレスティーナ」の増補版が出版されていった。これはひとえに、印刷技術が切り開いた、文学作品の創造と普及に関する新しい可能性のおかげであった。

「ラ・セレスティーナ」、1554年以降発展し始めるピカレスク小説、傑作「ドン・キホーテ」を含むセルバンテスの作品、これらはすべて印刷技術の申し子であり、リアリズム文学の傑作である。印刷技術なくしては、文学は口頭による思索やファンタジーに留まり続けていたであろう。そして、近代文学を最も良く規定する価値であるリアリズムは、発展の機会をもたなかったであろう。

1590年5月21日、ミゲル・デ・セルバンテスがインディアス、すなわちア

メリカで公務員の職を求めたことはあまり知られていない。スペインでの生活はあまり満足の行くものではなかった。しかし、あまりはっきりとしない理由で、彼の希望は叶えられなかった。おそらくは、彼が純粋な「古くからのキリスト教徒」の血筋ではなかったという理由によるものである。というのも、彼の先祖はユダヤ人であり、アメリカへ行くためには、完全なる「純血」を示す義務があったからである。ともかく、セルバンテスは、かなり不安定な経済状況と人間関係を抱えたままスペインに残り、偉大な作品を書き上げたのである。われわれは、もしかしたら、「ラ・マンチャのドン・キホーテ」のかわりに「インディアスのドン・キホーテ」を読む機会を失ったのかもしれない。彼の知的好奇心や非従順的な態度、天才的才能を考えれば、インディアスでの生活が彼の内面に大きなインパクトを与え、その文学作品に非常に大きな形跡を残しただろうと推測することは難くないからである。彼独特の力強いまざしと筆致をもってすれば、当時のさまざまな現実といくつもの神話を、完全に書き直すことができたかもしれない。おそらく、ミゲル・デ・セルバンテスがインディアスへ渡ることを拒否された時に、彼の才能を通じて自らをさらに豊かにする絶好の機会を、「発見の時代」は失ってしまったのかもしれないのだ。

(糸魚川美樹訳)

## 注

- 1) 訳者注：モリスコ (morisco) はキリスト教へ改宗したモーロ人 (高垣敏博監修 (2007) 『西和中辞典』 (s. v. morisco))。
- 2) 訳者注：コンベルソ (converso) はキリスト教への改宗者。マラーノ (marrano) はその蔑称 (高垣敏博監修 (2007) 『西和中辞典』 (s. v. converso, s. v. marrano))。